弘前学院大学ティーチング・ポートフォリオ

文学部・日本語・日本文学科
今村　かほる

作成日　2023年5月8日

1. 教育の責務

日本語・日本文学科の教授として、専門科目、特に現代日本語学の講義・演習・卒業論文などの必修科目を担当するほか、教職課程・日本語教員資格科目を担当している。その他、社会教育や学校教育関係の委員会に所属し、学生の教育活動を行っている。

また、外部講師を招聘し、社会問題・時事問題について、学生のみでなく地域住民と共に学習する機会を設けているほか、この11年間は文化庁支援事業を受託し、東日本大震災の被災地方言による地域活性化や危機言語・方言の保存・継承活動を大学と地域とで実践している。

2023年度担当授業

科目名	学年	授業種別	開講学期	概要
日本語学概論Ａ	1年	講義	前期	世界の言語の中で位置づけた日本語の特徴（国語と日本語、音声音韻・文字表記等）
日本語学概論Ｂ	1年	講義	後期	世界の言語の中で位置づけた日本語の特徴（語彙・文法・敬語・方言等）
日本語音声学	1年	講義	前期	日本語音声の実技と講義
現代日本語学入門	2年	講義演習	前期	現代語研究の基礎と調べ方の理解
日本語学演習ＩＡ	3年	演習	前期	国語教育における方言と共通語
日本語学演習ＩＢ	3年	演習	後期	社会教育における方言と共通語
日本語学演習ⅡＡ	4年	演習	前期	社会言語学
日本語学演習ⅡＢ	4年	演習	後期	社会言語学
卒業論文	4年	論文指導	通年	論文の作成指導
言語・文学・文化	1年	講義	前期	類型論・比較言語学、公用語、危機言語、ポライトネスストラテジー
キリスト教文化	1年	講義	後期	キリスト教とローマ字
地域研究Ｂ	1年	講義	前期	社会変化と方言、外国人労働者の支援
国語科教育法ⅡＢ	3年	講義	後期	授業研究
日本語学特論	院1年	講義	前期	社会とことば
日本語文法論	院1年	講義	後期	敬語論
日本語学演習	院1年	演習	後期	やさしい日本語

2. 教育の理念

社会人・豊かな教養人となるための基礎力として必要な、基礎的知識や技能、論理的な思考力や表現力を身につけるため、社会と学びを結びつける努力をしている。

研究対象である「日本語学・方言学・社会言語学」の知識を伝達するだけでなく、エビデンスを求め探す力、それらを基にした論理的思考や、表現力を培い、どのような職業にも共通する真の教養を身につけられることを目指している。

そのため、学生には「自分の知識として蓄えたものから、答えを見つけること・使える知へと変換すること」を提示している。具体的には、「思う」ではなく「根拠を基に考えられる」ことや、「根拠を示し、適切な表現により提示できる」ことの大切さを、具体的な例を示しながら繰り返すことが大切であると考えている。

学生に求めているのは、それらを経た後、小さくてもよいから、自分にしかできない「真実の発見」ができるよう、4年の年月をかけて育成したい。そうした基礎力が専門性を高めることにも、社会人として求められるソーシャルスキルにもつながっているととらえている。

3. 教育の方法

授業に、アクティブラーニングを取り入れている。また、概論＞各論＞演習＞卒論という専門科目の流れの中で、図書館教育やＩＣＴ教育には特に力を入れている。講義時の資料は、基本的にＰＰＴを利用し、オンライン・オンデマンド授業にも対応している。また、方言の語りや音声などの教材も動画作成し、紙媒体以外の資料提示をしている。　1年生の科目から積み上げ式にできているカリキュラムを通じ、図書館や情報メディアの使い方、ノートやレポートのまとめ方を繰り返し教え、その後、学生と図書館演習を実施し、課題に取り組んでいる。その際、他大学や公共図書館の利用、大規模データベースなど、学外のリソース利用を積極的に活用している。また、概論のような講義科目では、グループによるディスカッションを行っている。課題を課す科目は、提出された課題を、講義時に共有し、評価軸を示して学生同士が評価している。他の学生の課題を見ることで、自分との比較ができ、参考とすることができるように工夫している。

2年次科目では「調べる・まとめる・発表する」を授業目標に掲げ、問題点について、学術資料やコーパスを利用して調べ、グループワークを通じてまとめ、ＰＰＴによる発表を課し、ＩＣＴ活用の義務付けによって、スキルが向上する。また、グループワークにより調べ学習・まとめ学習の機会を設け、学生同士が学びあうことで協調性を育むだけでなく、自分とは異なる価値観や論理構築の仕方に触れる機会を作っている。3年次以降の演習科目でも、授業の基本は変えず、アンケート調査や、地域社会でのフィールドワークによる現地調査を実施している。また、今村の作成したWebページも利用している。

地域の課題に地域住民と取り組むことで、大学での学びが社会にどうつながっているのかを実感できる工夫をしている。地域社会をフィールドとして、大学と地域が一体となって学生の教育にあたる仕組みを導入している。その他の特色ある授業方法として、教員養成のために教職を目指す学生のために、同一法人の中学・高校における授業研究がある。2年次と3年次の2回、学生を中学・高校に伴い、臨地実習している。高大連携事業として、学校現場と大学の授業を繋げる幅広い・厚みのある実践研究となっている。

これらの評価のために、1回のみの試験でなく、発表や小課題を課し、学習成果を学生自身が確認しながら進められる工夫をしている。最後に学習の振り返りを行っている。

4.教育の成果

学生による講義評価では、講義科目の中でも概論について、「授業から新しい知識や技能、専門的な考え方、発想を学ぶことができるかどうか」について、評価が高い。高校までの学びと異なる「真実を自ら発見する」ための基礎力づくりとして、知識の詰め込みになりがちであるが、知らないことを知る喜び、すなわち、学習の喜びが1年生に伝わっている結果となった。科目で独自に行っているアンケートでも、「今まで知らなかったことを知ることができて楽しかった。」のように記されていた。

また、卒業論文の発表会において、3年次の演習で「調べる・まとめる・発表する」を実践したが、自分の独りよがりで、不十分だったことがよくわかり、卒業論文で突き詰めたいと思った。」と述べた学生がいた。学問をすることの真摯さが伝わっている事例として、重く受け止めたい。

3年次の演習は、文化庁の支援事業の一部として実施する活動がある。消滅の危機にある言語・方言の保存と継承という大きな目標の中で、学生を地域の方々と鍛えていく活動を通して、自分と社会とのつながり、学問の力を問い直すことに繋がっている。地域のみなさまから、学生たちに共通する「ヒロガクらしさ」を高く評価していただいている。

その他、就職セミナーやキャリアデザイン科目群などにおいて、ゼミの学生たちからは、「自分の言葉で自分について語ることができた」という感想がきかれた。これまで、自分にしかできない自分の仕事としての学問研究や、フィールドワーク、卒業論文などを通して、社会人基礎力を培うことを目指してきたが、卒業生に対し「先生のゼミの子なら大丈夫でしょう。」という評価をいただけることに学生の成長を感じている。

5.教育の改善

授業評価アンケートで評価が低かったことの中に、学生の発表までの準備時間が短いことに対する不満が挙げられる。学年の必修や、選択必修として受講者が多い中での演習活動であることや、コロナ禍にあって対面でディスカッションや調べ学習することに制限があるため、評価が低かった。

また、Teamsを利用して情報共有を促したが、ファイルの共有時に上書き保存される仕組みや、チャットや投稿の見え方などの周知が十分にできたとは言えなかった。道具を十分使いこなせていないため、学生同士、教員と学生の距離が却って開いてしまったことが反省される。

情報の出し方、伝え方について整理し、誤解が生まれないような工夫が必要であると考える。

6. 教育の目標

アフターコロナの時代に求められる社会的スキルとして、リモートワークのための基礎的理解と活用する力は、依然としてあるだろう。そのため、短期的にも長期的にもＩＣＴ活用のための努力は続ける必要があると思われる。

また、文学部という学問特性として、「目に見えない価値」とか、「すぐには使えない知の価値」について真剣に向き合う必要がある。言語学は実学としても20世紀をけん引してきた経緯があるが、豊かな創造性を育むためには時間が必要である。マニュアルや見本に頼り、すぐに答えの出ることだけが「価値」ではないことを伝えるための新たな工夫が必要である。

短期的な目標としては、「日本語学」という専門性を身につけるにあたり、明らかに答えが複数考えられる問いを作成し、「調べる・まとめる・発表する」活動をさせることである。それにより、「何が真実か」を複数の視点から獲得できるように促す。

【資料】

1. シラバス
2. 講義資料・教材
3. 講義評価アンケート
4. 学生振り返りアンケート
5. 授業改善書
6. ＨＰ